

追悼特別号
1998年6月30日

ICU

Gazette

For all members of the university community and friends/published by the Public Information Office, International Christian University, Mitaka-shi, Tokyo 181.

モーリス E.トロイヤー
アルヴィラ S.トロイヤー追悼号

ICUの初代学務副学長のモーリスE.トロイヤーさんとその夫人アルヴィラ(ビリー)さんが昨年相次いで逝去されました。

この追悼特別号では3月21日に行われた記念礼拝の様相を再現いたします。また式後のお茶会でのスピーチも併せてご紹介いたします。



アルヴィラ S.トロイヤー モーリス E.トロイヤー

メモリアルサービス		お茶会	
式次第.....	2	返答 デイヴィッド・A.トロイヤー.....	18
トロイヤー夫妻略歴.....	3	スピーチ 原一雄.....	20
式辞 古屋安雄.....	4	B・C.デューク.....	21
追悼 長(武田)清子.....	6	写真展.....	23
都留春夫.....	8		
土橋信男.....	13		

モーリス E. トロイヤー アルヴィラ S. トロイヤー 記念礼拝

International Christian University
Chapel

March 22, 1998
2:30p.m.

司式 牧師 古屋安雄
奏楽 植田義子

招詞

賛美歌 第88番「過ぎにしむかしも」

聖書 ヨハネによる福音書13:1,3-5,12-15 ジェーン・デューク

式辞 古屋安雄

祈禱

賛美歌 第158番「あめには御使」

追憶

長清子
都留春夫
土橋信男
斎藤和明

賛美歌 第419「主イエスにありては」

祝禱

挨拶

後奏

デイヴィッド A. トロイヤー

アルヴィラ・スプランガー・トロイヤー

1904.5.25-1997.7.1

アルヴィラ(ビリー)・トロイヤーさんは1904年5月25日にインディアナのスイス系メソジスト教派のジェブサ・スプランガーとキャスリーン・スプランガー夫妻の間に生まれた。ブラフトン大学で学び、1926年より小学校で教鞭を執った。1925年にモーリス・E・トロイヤー氏と結婚。

シラキウス大学婦人会会長を勤め、ニューヨーク州シラキウスのパークセントラル長老派教会、ICU教会、さらにペンシルヴェニア州メイプルグリーンサプリー長老派教会会員でもあった。また世界祈祷日のために活躍した。

夫妻はICUに17年間滞在、その間夫人はICUおよび自由学園において英会話を教え、ICU教会婦人会の熱心な会員でもあった。1997年7月1日逝去、93歳。

モーリス・エマニュエル・トロイヤー

1903.8.24-1997.12.19

心理学者、また教育者として世界的に著名なモーリス・E・トロイヤー博士はブラフトン大学を卒業、オハイオ州立大学で博士号を取得。教育学、カリキュラム改革の研究および教授をかさね、両分野で高名な業績を生んだ。またワシントンのAmerican Council on Educationで教員評価の仕事に関わったのち、シラキウス大学の高等教育部長を勤めた。彼の教え子達は今もアメリカや日本そしてアフリカの国々など世界中の高等教育の場において活躍している。

トロイヤー博士は第2次大戦後来日、ICU創立のために助力し、その後15年間ICUの初代学務副学長、教授を勤めた。その労に対して日本政府から勲三等を叙勲されている。

その後博士はNational Council of Churchesの海外教育政策顧問、ユネスコ東南アジア代表、オハイオ州立大学の客員教授を勤めた。またいくつかの名誉教授の称号と賞を授与されている。

晩年はペンシルヴェニア州スプリングハウスのGwynedd Estatesに居住。1997年12月19日ノルマンディーファームズで逝去。94歳

トロイヤー夫妻のご家族は、息子の故ロバート・J・トロイヤー氏、その妻のルース・ムーア・トロイヤーさん、娘のジョアン・トロイヤー・ライシングさんと夫のエドワード・J・ライシング氏、そして息子のデイヴィッド・A・トロイヤー氏と妻のバーバラ・ミッシェル・トロイヤーさん、さらに7人の孫と15人の曾孫がいる。

トロイヤー夫人とトロイヤー博士のアメリカでのメモリアルサービスはそれぞれ1997年7月と12月にGwynedd Eastesで行われた。

式 辞

本学名誉教授 ICU教会名誉牧師
古屋安雄

トロイヤー博士夫妻は、大学として、またコミュニティとしてのICUの文字どおりのファンダーズ、基礎を造られた方々のなかのお二人でありました。1949年、シラキウス大学のウィリアム・トーリー総長の強い推薦で、トロイヤー先生はICU設立組織委員会のメンバーとなり、ICU創立を決定した、いわゆる御殿場会議に出席するために、初めて来日されました。

そしてトロイヤー夫人とともに、ICU開学前の、まだキャンパスの形をなしていないこの場所に、財務副学長のハケット夫妻とともに最初のノン・ジャパニーズとして住まわれました。トロイヤー先生が学務副学長に選任されたからです。アイグルハート博士の「ICU創立史」はそのときのことを次のように記しています。「1951年11月、トロイヤーは夫人と子息のデイヴィッドを伴って日本へと発ち、三鷹のティームに加わった。トロイヤー一家は、以前、倉庫だった長屋風の建物を六戸のアパートメントに改造したうちの戸に仮住いすることになった。急ごしらえの暖房装置はあったが、暮しやすい生活のための設備は殆どなかった。それに日本語が全然分か

らなかった。デイヴィッドは、けなげにも東京都内のアメリカン・スクールまで通学するという冒険をしなければならなかった。まさに辺境の暮しだったが、建設の喜びと熱意がみなぎる生活でもあった」(142頁。P.115)。

お二人のICUに対する貢献については、このあとの追憶で述べられると思いますので、私は牧師として、お二人の信仰的な側面について、申し上げたいと思います。お二人は、ICU教会の創立会員であり、忠実な会員であったのみならず、役員会のメンバーとして、またトロイヤー先生は役員会委員長として、奉仕されました。お二人が学ばれた、ブラフトン・カレッジはメノナイト派の大学ですが、トロイヤー先生の父上は、その教派の牧師であり、病院を創立されました。トロイヤー夫人もスイス系メノナイト派の出身であります。メノナイト派は、クエイカー派と同じく、無抵抗主義と絶対平和主義にたち、奉仕活動に熱心な教派であります。その後、トロイヤー夫妻は長老派に所属されましたが、その信仰生活にはメノナイトの敬度、バイエティが流れていました。

私が、今でも思い出すのは、ある年の受難

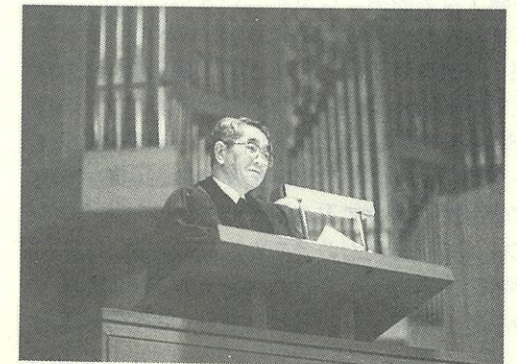
週の洗足木曜日のことです。これは、キリストが十字架にかかれる前日に、弟子たちの足を洗われた、というヨハネ福音書の13章に記されていることを、記念する日です。しかし、ICU教会では、大抵のほかの教会と同じく、聖餐式を行いません。

その聖餐式あと、トロイヤー先生は、自分たちが子供のとき、メノナイトの教会では、洗足木曜日には、文字どおり互いに足を洗う(Feetwashing)儀式をした、という話をされたのです。私はその時初めて、トロイヤー夫妻がもとはメノナイトであったこと、そしてメノナイトが今でもそのような伝統をもっている教派であることを知りました。と同時に、大学行政者および教育者として、副学長と教授の職務に従事される先生、そしていつも笑みをたたえて、同僚や学生たちを自宅に招いて接待される夫人、またお二人の教会での奉仕、特に夫人の婦人会での献身的な奉仕、それらの全ての根底に、この洗足の精神があることが、分かったのです。それゆえに、トロイヤー先生はくりかえし、「何のための教育か?」という問題提起をされたのでした。そして、先生の答えはいつも「キリストの精神をもって神と人に仕えるため」でありました。

ヨハネ福音書13章の12節から15節までをもう一度読みます。「こうしてイエスは彼らの足を洗ってから、上着をつけ、ふたたび席にもどって、彼らに言われた、『わたしがあなたがたにしたことがわかるか。あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりでである。しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互いに足を洗い合うべきである。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ』」。

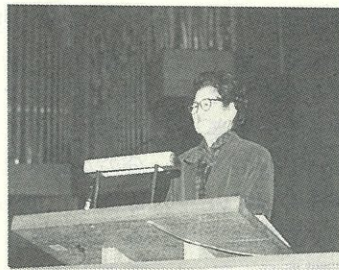
私たちは、今日お二人をしのんで、その生涯全体を神に感謝するものでありますが、特

にその壮年期に、お二人が、このICUという新しい大学を始めるという、日本の教育における冒険のために、尽力されたことに、深い感謝をささげるものであります。今からは想像もできない、あの戦後間もない、貧しい日本に來られて、さぞ苦勞をされたと思いますが、お二人でよく働かれました。まことに、「善かつ忠なる僕」でありました。残された私たち、特にこれからのICUを担う世代が、トロイヤー夫妻のような先達の勞苦を忘れることなく、そのよき模範にならって、自分のためではなく、神と人に仕えるものとなるよう、願ってやみません。そのことを、今、天にあって、トロイヤー夫妻も願っていることでしょう。天にある夫妻の靈のうえに、神のたもう平安が、そしてご遺族の方々のうえに、神よりの慰めが豊かにありますように、祈ります。



追悼

トロイヤー教授夫妻を偲ぶ



本学名誉教授 長(武田)清子

ICU初代学務副学長・トロイヤー教授は、リベラル・アーツの教育理念に立つこのユニークな大学創設のために尽力し、その基礎を築いた功労者の一人でした。本日、そのトロイヤー教授夫妻にまず心からなる感謝を届けたいと思います。

『回想録』の中でトロイヤー教授は次のように述べております。

「私が日本にやってきたのは、デモクラシーとキリスト教の価値や実践方法を研究し、経験する実験場となる新しい大学の形成を支援するためであった。」(311頁)

私がトロイヤー教授と個人的出会いを始めて持ったのは、1953年、私がICUに参加して間もない時のこと、「リベルテ」という、社会問題や社会科学の研究を課題とする一つの学生クラブのアドヴァイザーになってくれと彼より頼まれたのでした。同教授のお話によると、当時、ICUのファカルティは、社会主義を研究するかも知れない、このようなクラブを恐れてアドヴァイザーになり手がな

い。(時はまさに、マッカーシズムの嵐の吹き荒れる時期でした)。だからそれを引き受けてくれないかということでした。私は次のように答えました。「ICUの行政当局が求めるかもしれない方向へ彼らを導くというような役割を果たすことは約束できない。その学生たちの友人になるということくらい私には出来ないと思う」と。すると、彼は、「それで良い。是非、彼らの友人になって下さい」と。こういう次第で、私は、そのいわゆる「危険」な学生クラブである「リベルテ」のアドヴァイザーに任命されたのでした。このことは、私にとって、予期せずしてICUの素晴らしい学生たちと個人的に親しく知り合う機会となり、ある方々は生涯を通じての親しい友人となりました。その中にはICU国際関係学科の近藤健教授、ICU高等学校の桑ヶ谷森男校長、石渡茂大学院部長らをはじめ、多くの人々がいます。

トロイヤー教授の学生とのかかわりは、忍耐強く寛容でした。その『回想録』の中に一つ興味深い出来事が書かれています。ICU教

会の一つの委員会に於て、牧師に対して、ある学生が非常に失礼な暴言を浴びせかけた。(この牧師は多分、豊富牧師)。トロイヤー夫人はそれに非常に心を痛めていた。そこで、翌日、トロイヤー教授は、その牧師に昨夜のことについて私とその学生と話しあってみようかと尋ねた。すると、彼は、そういうことはしないでください。実は、一昨年の夏、キャラバンに同行した時、あの学生がキリスト教の意味について次のような話をしたことがある。「私はICUにおいてトロイヤー先生を怒らせてやろうと思ってあらゆることをやってみたが、彼を怒らせることはできなかった」と。「あの学生は私を同様の方法で試しているのではないかと思います」と牧師は語ったということです(397-1298頁)。

このお話はトロイヤー教授夫妻の信仰と生き方を物語るものと思います。トロイヤー教授はシラキウス大学学長の強い推薦により教育専門家として選ばれ、米長老派教会から日本に派遣されたのですが、ご夫妻はもとはメノナイトという小さなセクトの出身です。私は、その家庭的背景をも含めてお二人からもっといろいろ伺っておきたいと思いましたので、1996年3月、近藤健教授が研究休暇でワシントンD・Cに行っておられた折、幾つかの質問を送り、トロイヤー先生にインタビューしていただくことをお願いしました。近藤さんは、お忙しい中、私の質問を英語に訳して前以て送っておき、都合を打ち合わせてペンシルヴェニアまで訪ねて行って下さったのでした。そのレポートによりますと、トロイヤー教授の父上はイリノイ州の農民で、メノナイト教会の信徒の中から選出された牧師でした。神学教育を受けていなかったの、週一回、シカゴの聖書研究所に通い、神学を学び、礼拝説教の前日は徹夜で準備をしたとのこと。父上は、また、神学校、病院、看護婦養成所などの建設につとめ、アフリカのコンゴ(現在のザイール)へ宣教師を送

る活動をも進めた人でした。こうした家庭的背景を私は興味深く思います。夫人のビリーさんもスイスから移民してきたメノナイトの農民の家族の出身です。お二人は大学で出会い、結婚されたのでした。

ところで、ICUの初代教養学部長、C・クライダー教授夫妻もメノナイト教徒でした。

ドイツの著名な神学者で哲学者のE・トレルチは、彼の本(Die Soziallehren der Christlichen Kirchen und Gruppen, 1912)の中で、メノナイトはアナバプティストの混乱からメノ・サイモンズ(Menno Simons)によって集められた平和的、敬虔、かつ、福音主義的なセクト・タイプのプロテスタント・コミュニティだと定義しています。私も、メノナイトは、キューカーと同様に、敬虔で平和主義に立ち、寛容を尊ぶプロテスタントのグループだと考えています。ICUの創設期に重要な役割を果たした人々の中の幾人かが、アメリカの大きな教派の代表者ではなく、偶々、こういう性格の小さなセクトであるメノナイト教徒だったということは非常に興味深く、また、重要だと思います。このような信仰の質の故に、彼らは、文化的、学問的に異った背景をもつ学生やファカルティと力をあわせて、リベラル・アーツというチャレンジングな教育理念に立つ新しい大学形成のために、忍耐強く働くことが出来たのではないかと考えさせられます。

もう一つの質問は息子さんのディヴィッドのことでした。御両親と共に三鷹に来た時、14才だった彼の当時の生活やその後の様子を知りたいと思ったのでした。詳細に立ち入る余裕はありませんが、トロイヤー教授夫妻がこのキャンパスに来られた時、その家族が唯一の外国人であり、大沢や三鷹周辺でICUが何かを知っている人は殆どいませんでした。交通機関は非常に不便であり、ディヴィッドは遠く目黒のアメリカン・スクールまで通わねばならず、いろいろ

ろな困難を経験したようです。

私の質問に対するお答の一部を、亡き夫人の許しを乞うて引用させていただきたいと思えます。「そのことについてそれ以来私たちが語りあう時、これは私たちがICUに支払った最高の代価の一つだったと感じました。私たちは大学を開始するために非常に忙しく、デイヴィッドのために十分に時間をとることが出来ませんでした。しかし、今、彼にそのことを話すと、彼は、『あのことは自分の人生における最善の出来ごとだった』と言ってくれます。」

デイヴィッドのこの言葉は、幼い息子のためにあの頃、もっと時間をかけることが出来ていたらよかったという悔恨を長い間、抱き続けてきた夫人を深く慰めるものだったとのことです。

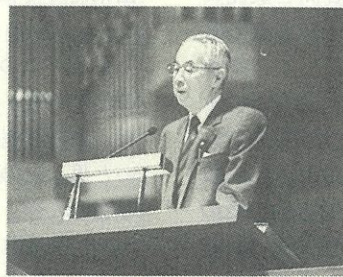
最近、私は、ICU50年史の準備として卒業生の幾つものグループの方々と語り合う貴

重な時を持ってきましたが、多くの方がICUのリベラル・アーツの教育がその人生に重要な意味をもってきたこと、また、殊に、初期の卒業生が、教授たちからだけでなく、夫人や子どもを含めて、ファカルティの家庭生活全体から学ぶことがいかに大きかったかを強調していたことが印象的でした。

デイヴィッドは私への手紙の中で御両親について次のように書いています。「二人で一つ、仲のよいおしどり夫婦として、彼らは、いつも、自分の子どもたちのために、友人たちのために、父の学生や同僚のために存在してきました。彼らは人々を愛し、人々を信じ、その最善のものを思い、すべての人々に親近感を持っていました」と。

湯浅八郎初代学長夫妻と共に、ICUにとって最も大切な精神的「隅の首石」を置いたトロイヤー教授夫妻を覚えてこの追悼礼拝に、デイヴィッドもカリフォルニアから参加出来たことを感謝します。

モーリス・トロイヤー博士夫妻の思い出



本学名誉教授 都留春夫

デイヴィッド・トロイヤーさん、1955年に

お別れして以来、44年振りでお会いすること

ができて、大変うれしく思っています。この記念礼拝にご出席下さり有難うございます。

トロイヤー先生に、最初にお目にかかったのは、1949年6月21日(火曜日)で、ICUの創立を決定づけた御殿場会議が終わって間もないころでした。記録によりますと6月21日の午前中に、先生はラーフ・ディッフENDORF博士とともに宮中に伺い昭和天皇に拝謁しておられ、私の方は、国際基督教大学研究所のセミナーに出席していました。その日の午後、緊急の研究所会議が召集され、その場に出席されたトロイヤーとディッフENDORFのおふたりから、1951年から52年に開学する国際基督教大学の構想についての報告を受けました。説明の責任を取られたのはトロイヤー先生で、その構想は、私たち研究所員たちが練ってきた総会大学案とは全く違うものであり、それによって、研究所員や研究生と将来設立されるICUとの関係は白紙にもどされることになりました。それを聞いた私たちの仲間の中には衝撃を受けた者が沢山いました。

先生に対する私の第一印象は決していいものではありませんでした。説明の仕方が一方的で情容赦のない高圧的なアメリカンという感じでした。

2ヶ月後に渡米して、ミシガンに滞在中の父に会い、この時の話しをしますと、父は、「ドクタ・トロイヤーという方は典型的なヤンキーのようだね。話し方は押しつけがましく聞こえるけれども人柄はきっといい方だろうよ」というのでした。どうやら、この父の言葉の方が当たっていたようです。

二度目にトロイヤー先生にお会いしたのは、1952年3月30日(日曜日)、場所は表参道にある東京ユニオン教会でした。日曜礼拝の後で、近くの席の方々と挨拶を交したときに一番はじめに眼が会ったのが、ドクタ・クライダー(初代ICU教養学部長とドクタ・トロ

イヤー(同学務副学長)でした。お互いの自己紹介が終わるとすぐに、モーリスが私に「Why don't you come to ICU and work with me?」というのでした。

この言葉が、その後の私の人生の歩みを決定づけることになりました。その時、すでにYMCAに行くことに、ほとんど決めかけていた私は、早速、YMCA同盟の総主事の齊藤惣一先生にお会いして相談しましたが、「都留さん、あなたにYMCAにきてもらうことはすでに決定しています。しかし、私は、ICUの理事をしていますので、ICUに行ってはならないとも言えません。24時間あげますから、よく考え、祈った上で、明日決心を伝えに来て下さい」といわれました。

1ヶ月後の4月末に私は、スタッフの一人として、ICU語学研究所の開講式に参列していました。

ビリー・トロイヤーとデイヴィッド・トロイヤーに、はじめてお会いしたのは、その頃だったと思います。

モーリスとビリーは熱心で敬虔なクリスチャンでした。お招きをうけて夕食を頂いた後は、いつも、モーリスが大きな聖書をひろげて、その一部を読んで聞かせて下さいました。日曜日の礼拝後には、スーツの胸のボタン孔に、季節季節の花もさして、にこやかに礼拝堂の入口に立ち、参列者の誰彼となし、親し気に声をかけて歓迎しておられるモーリスの姿が見受けられました。

初期の頃にスイスから来ておられた神学者のブルンナー先生のお宅で、月1回、ICUのスタッフのための聖書研究会が開かれていましたが、その席上で、キリストの十字架上の死の意味をめぐって、ブルンナー先生とモーリスの間ではげしい討論が繰返されることがありましたが、日頃親しくテニスなどをしておられたおふたりの間に交される、真剣な言葉のやりとりを聞いているのは、そばに私には、とてもたのしいことでした。

ビリー・トロイヤーは、暖かなお人柄で、学長湯浅八郎博士の清子夫人とおふたりで、中心になって、ICUファミリーの結束と交わりを深める推進役をつとめておられました。率先して、学生、教員、職員およびその家族たちを自宅のお茶や食事に招いておられました。

私の記憶に間違いがなければ、語学研究所が開かれて間もない頃から、ビリーは毎週金曜日の昼食に学生を数人ずつ招き食卓とともにされるようになりました。副学長夫人が一年生を次々に食事に招くということは、従来の日本の大学では考えられないことでしたので、学生たちはおよろこびでした。

しかし、おどろいたことに、数ヶ月後のある日、私はビリーから呼ばれて、

「ハリー、学生たちは、ほんとうに、私たちの家での昼食をたのしんでいるでしょうか」と訊かれました。招かれた学生はみんなよこんでお宅に伺っているものと思っていた私は「どうしてですか」と何うことしかできませんでした。すると夫人は、「なぜだか、このころは、毎回、2、3人、予告なしに、食卓とともにしにこない学生がいるので、かえって迷惑なことをしているのではないかという気がしているのですが」といわれるのでした。当時の学生たちは、まだ、お招きに対して無断で欠席することが、どんなに失礼にあたるかということに気付かないのでした。

ともあれ、その頃、学生たちは英語の予習・復習がいそがしくて、昼休みもろくに休まずに、英会話の暗唱をしていました。

"Elvira swallowed a pin..."とか

"Oh, it's a bit of a surprise..."

などという大声が、本館前の広い草原中から聞こえてくるのがつねでした。

それでも、心のひろいビリーの口から、学生を悪くいう言葉を聞いたことは一度もありません。いつも明るい笑顔で、誰でも迎えいれようと努力しておられたのが忘れられません。

ICUに勤めはじめたその日から今日に至るまで、トロイヤー先生は私にとって、人生の先達であり、師であると同時に、上司であり、スーパーヴァイザー、アドヴァイザーであり、また、たえずサポートし、エンカレッジして下さっていました。

大学に関係する者にとって生涯の指針になるようなたくさんの言葉を残して下さいます。今日は時間の関係で、その全部についてひとつひとつ詳しく述べることはできませんが、そのうちのいくつかをご紹介しますと思います。

(1) 学生担当の職員としての成果をあげるためには、まず学生から受け容れられると同時に、同僚となる教員や職員からも受け容れられるように努力せよ。そのためには、自分のオフィスに彼が訪れてくるのを待っているのではなく、自分から積極的に皆の中に入って行くように。

そういわれるトロイヤー先生ご自身は、自ら率先してキャンパス・コミュニティのすべてのメンバーに親しもうとしておられました。英語が話せない技術職員や庭師などに対しては、習いたてでまだたどたどしい日本語を使ってでも近づきになろうとなさるのでした。

そのような先生の人柄を示すひとつのエピソードがあります。本当にあったことかどうかはさだかではありませんが、いかにもひとなつこい先生の性格があらわれていて、紹介するたびにほほえみを禁じ得ないお話しです。

学内に居を構えられてから、まだ間もない頃のある朝、広いキャンパスの草や樹木の世話をしている宮沢吉春さんが、トロイヤー先生のお宅に、自分の畑でとれた大きな西瓜を届けました。食べてみるととてもおいしかったので、先生は、直接宮沢さんにお礼をいおうとされました。英語が通じないので、大きな笑みを顔に浮かべながら、

"Thank you for the watermelon, Miyazawa-san.

It was トテモ チイサイデシタ」といわれました。本当は「トテモ オイシイデシタ」というおつもりだったのです。大切なのは、言葉より、先生のあの笑顔でした。

宮沢さんは、広いキャンパスの中にあるすべての樹木について、どこに何があるということを知っている二人のうちのおひとりでした。もうひとは当時の学長湯浅八郎氏でした。

(2) 学生生活に関する学内規則や規約を作成するに当たっては、基本方針など原理・原則を確立しておけば、細則などはできるだけ作らないほうがいい。何か事が起これば、原理、原則や基本方針に立ちもどり、そこで一緒に考えて、どうするかを決めよう。

(3) ICUはアカデミック・コミュニティなのだから、どのような問題の解決に当たっても、耳から上を使い、耳から下を使うべきではない(ear up, not ear down)。つまり、頭を使い、理性によって事柄の解決をはかり、情動(emotion)や暴力(violence)に頼るべきではない、という、かたい信念を持っておられたのです。学生が力によって本館の封鎖を試みたりすると、先生は学生のリーダーたちのところに出かけてゆき、話し合いで解決をしようと試み、激しい口論になることもしばしばでした。感情的になった学生が、かたくなに力に頼ろうとするのに対しては、強い不満を持たれるのでした。

(4) 先生は私の上司でしたが、決して上から命令を下したり、自分の考えを無理に押しつけようとする方ではありませんでした。時には、熱心のあまり語調が鋭く、厳しくなるので、強制的に圧力を加えられるような錯覚を起こさせるので、私が得た第一印象のような誤解を生じることがありますが、先生の人柄がわかってしまえば、いつも私たちと同じレベルにいて、側(かたわら)から語りかけ、エンカレッジしようとしておられることがよくわかります。

"Harry, if you have any new ideas which you

think good for students, you make plans and go ahead, do it. If it doesn't go well, I will take the responsibility for it"とあって、新しい試みをするようにはげまして下さるのでした。先生のおかげで、私は当時の日本の大学では、まだ行われていなかったような内容の'Freshman Orientation'や'Freshman Camp'や'Student-Faculty Council'とか'Counseling Network'のような、いくつもの新しい構想を実施してみることができたのでした。

このようなときに先生は口癖のように「日本人の中には、とかく、まだことを始めない前から、失敗するのではないかということに心配し、過去に失敗したときのことをふりかえってばかりいる者が多いが、私はそういう生き方は好まない。

"Harry, you go ahead. Don't move forward looking backward"

といわれるのでした。

先生のこの言葉は、私に、父から与えられたいましめを思い出させるのでした。それは、福音書にある：

'No man, having put his hand to the plough, and looking back, is fit for the Kingdom of God' (手を鋤につけて後、うしろを顧みる者は神の国にふさわしからず)(ルカ9:9)

というのです。

このようにして思い返してみると、トロイヤー先生と私の関係には切っても切れないものがあるのがわかりますが、50年にわたる先生との交流の中に、一度だけ、「もうだめになった」と思ったことがあります。

それは、先生が1967年に米国に帰られる時のことでした。当時教育学科長をしていた私の部屋にこられた先生は、「価値観の研究」の主任を引き継ぐようにと私に迫られました。私が「それは到底私がお引き受けできるような仕事ではない」といって辞退すると、大変お怒りになり、激しい言葉で私の弱気を責められたのでした。シラキュースに帰られた後に

も、強い叱責の手紙を頂いたので、もう先生の方から関係を断ち切られるものと覚悟を決めました。

そのまま、10年余りは、ごくまれにしか文通をしませんでした。

しかし、1979年になって、やはり先生と私の関係が切れていないことがわかったのは、大きなよこびでした。その年の5月の初めに、ワース先生とアメリカ諸大学訪問の旅に出かけましたが、ロス・アンジェルスに到着した直後にトロイヤー先生からの電報が届き、読んでみるとフィラデルフィア空港に到着する時間を早く知らせるようという内容でした。いくつかの大学を訪問した後にフィラデルフィアの空港に着いたのは5月9日でした。

空港にはトロイヤー先生がジョン・コヴェントリー・スミスと並んで迎えて下さり、そのまま私たちはトロイヤー先生のお宅に泊めて頂くことになり、先生ご夫妻とスミス先生から親しいおもてなしをうけることになりました。スミス先生と私との間には父の代からの親しいお付き合いがあり、この時に、トロイヤー先生のみでなくスミス先生およびご夫人にお会いできたのは、私にとって忘れられない思い出になっています。

トロイヤーご夫妻と最後にお会いしたのは1990年5月31日の木曜日でした。数日前からニューヨークにいるICU卒業生の岡隆夫妻のお世話になっていた私のところにピリー・トロイヤーから電話がはいり「いまマサチューセッツの娘のところに来ているが、あなた方が訪問予定にしている頃には自宅に帰っているから、是非その日に来るように」といわれるのでした。

そのお言葉に従って当日の朝ニューヨークから特急列車でフィラデルフィアに向かい、乗り換えてアンブラーの駅でお迎えを受けるつもりで出掛けたのですが、お昼近くにフィ

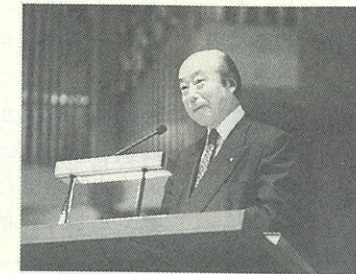
ラデルフィアに到着しプラットフォームから階段の上を見上げると、そこにトロイヤーご夫妻の笑顔がありました。びっくりして、どうしてここまで来られたのかと何うと「アンブラーで待っているつもりだったけれども、待ち切れなくなり、ここまで来ることにした。この方が1時間余計に話す時間が作れるから」とのお話でした。それから数時間をお宅で過ごした後、アンブラーの駅でお別れするまでの間ずっと、お互いにICUの思い出話をしつづけていました。この時は、おふたりとも、何度か体調をくずされた後でしたが、いつもとかわらぬ笑顔で、再会をよるこんで下さり、大変なおよこびでした。もう遠くまでのドライブは無理だが、おうちの近くには車で出かけられるとのことでしたが、ドクタ・トロイヤーは「ミスタ・チノがホンダに関係している限り、自分はホンダ以外の車には手を出さない」といっておられました。この日アンブラーの駅まで見送って下さったご夫妻の顔のほほえみは、今も私の眼に浮かびます。

こうして、お話しをしはじめると、トロイヤーご夫妻との思い出話は次から次へと尽きることなく出て来ますが、今回は、これで終わりにさせて頂きたいと思えます。

最後にひとこと。誠にトロイヤーご夫妻は信仰と希望と愛に満ちた方々でした。そして、"Harry, you keep-steadily moving forward, not looking backward, God will help you"といっておられるおふたりの笑顔が、今なお私の胸のなかに焼きついています。

トロイヤー先生のご尊父の大きなポートレートに記されているのは、おふたりが名誉学長の湯浅八郎博士と思いを共にしておられた聖書の一節で、それは、'where there is no vision the people perish...' (幻なき民は滅ぶ—「箴言」29:18) という言葉です。有難うございました。

ミセス・トロイヤーの思いで



北星学園大学学長・ICU 5期生
土橋信男

忘れもしない、トロイヤー先生ご夫妻に初めてお会いし、またお話したのは、私がICUのフレッシュマンの秋のある夕方のこと。

ICUキャンパス内にあったトロイヤー学務副学長のお宅を訪ね、玄関の呼び鈴を押し、出てこられたミセス・トロイヤーに、先ず「ハロー」とご挨拶。いきなり訪ねてきた新人に何事かといぶかるミセス。「私は第一男子寮の一年生の土橋というものだが、我が部屋の全員を夕食に招いて欲しい」と、とんでもなく厚かましいお願いをしたのである。断られると思いきや、ニコニコした表情で、「OK、いつがいいの？、いつでもいいですって。じゃあ、ミスター・トロイヤーの都合をきいてみるわ」といわれ、「ハニー、ちょっと来て、ここに学生が来ているわ、夕食を我が家で食べたいのだそうよ、あなたの都合はいつがいいの？」と、そこにトロイヤー先生まで現われたのであった。

冷や汗をビッシヨリかきながら、上級生たちからそそのかされた交渉(?)に成功した私は、寮の部屋に帰ると、わが部屋の上級生た

ちに、「やった、大成功！来週の金曜日の夕方に夕食に招いて下さるそうです。」と報告したのであった。

「おい、本当か？やや、まいったな。じゃあ、皆で行くか。」と、最初は冗談で、「お前、トロイヤー先生のところへ行って飯を食べてくれって行ってこれるか？君の英語じゃ無理かな？」などいっていた上級生たちも、それが本当に実現したので、神妙にその次の金曜日に、4人(当時は一部屋に4人が住んでいた)で打ち揃ってでかけ、トロイヤー宅の美味しい夕食を御馳走になったのであった。(おそらく、このようにトロイヤー先生の御宅に押し掛けて御馳走になったのは、我々が最初で最後ではなかっただろうか。ところで、その上級生たちの内のお二人は、何と現在のICUの重責を担っている斎藤和明学務副学長と石渡茂社会科学科教授。お二人は、昔はこんなにやんちゃだったのである)

初期のICUには、確かに一新入生がこともあろうに副学長の家へ夕食の無心をするなんてことが許された雰囲気があったのだが、

何といっても、このエピソードが成り立ったのは、優しく寛容であり、いつも笑顔で私たちに接して下さったミセス・トロイヤーの人柄であり、またトロイヤー先生の包容力だったのではなからうか。

私にとっては、一生決して忘れられないこの冒険のエピソードも、後に記すように、私がシラキウスで先生のICUの最後の弟子として学んでいた時に、覚えていらっしゃるかどうかお尋ねしたことがあったのだが、「そんなことがあったのかしらね。全く覚えていないわよ」とおっしゃられたのは、いかに多くの学生たちが、色々な機会に先生のお宅でお招きに預かっていたということを示すからに相違ない。

ICUの教養学部時代には自然科学科で理科教育を、大学院では教育哲学を専攻した私は、ICUではトロイヤー先生の授業をとることがなかったが、3年の時に学生会の会長となり、学生会代表として定期的にSFC (Student - Faculty - Committee)で接することとなり、先生の率直な態度に、これが米国流の学生に対する教師のありかたかと、多くのことを学んだように思う。そして、その期間に、先生ご夫妻は、金曜日の夕食に学生会の役員代表を正式に招いて下さった。ICUで先生の御宅での夕食を御馳走になったのは、それが二度目で、そして最後だったと思う。

大学院を修了後、ICUに大学行政のための助手として残り、大学教育についての関心を深めるようになり、米国で高等教育について学びたいという願いを持つようになり、それが実現できたのは、トロイヤー先生がICUをご退職後、学科長をされていたニューヨーク州のシラキウス大学大学院の高等教育行政学科の博士課程に受け入れていただいたからであった。

そして、本格的にトロイヤー先生の授業を履修することになり、一ひねりした、あの難しい英語に授業で接することになってしまっ

たのである。

先生の授業で先ず全員が課せられたのは人間と教育についてのCredo(信条)を書かせられたことだった。デューイがそうしたように、と言われて、最初書いたものを、授業が進むにつれて、何回も書き返すのだったが、学ぶごとに自分の考え方がかわるものだということを実感させられたものだった。

また、先生は教育の過程、特に高等教育の過程は、偏見を取り除かれ、人が解放される過程(Bias reduction)でなければならぬと、よく主張された。これは、今でも先生からの教えとして、私自身が授業で学生に語っていることである。

先生の授業のうちの一つに、さまざまな分野の専門家を招いて、その方の講義の後にディスカッションをするものがあった。それは、大学の教室ではなく、ご自宅の地下の部屋で行なわれ、終了近くに必ずミセス・トロイヤーがお茶とケーキを用意され、それとともに講義の内容を離れたおしゃべりになるのだった。クラスメートたちも、その時間が一番楽しいようで、その授業が一番人気の授業であった。それは、もちろん先生の授業もさる事ながら、ミセス・トロイヤーがいらっしゃる、お茶とケーキとともに、ミセスの存在によって和やかな雰囲気が醸し出されたからだったことは間違いない。

シラキウスには結局5年半滞り、トロイヤー先生のご指導の下で博士号もいただき、本当に先生と奥様にはお世話になった。

札幌の大学に職を得、シラキウスを離れることになり、空港までお二人でお見送り下さった時言われたのは「グッバイ、でもまたきっと会えるわよね」と言う言葉だった。日本へ帰ってからは、時折の手紙の他には、殆どクリスマス・カードのときだけのご挨拶になってしまっていたので、1992年から米国へ1年間の海外研修の機会を得た時には、必ずご夫妻を訪れようと決心していたのだった。

そして、それを実現させたのは1993年の2月。フィラデルフィアの郊外の、高齢者用住宅、といっても200戸程の2DKのアパートが連なっている2階建のホームの、花できれいに飾られた玄関に、お二人で出迎えに出て下さった。そこから長い廊下を歩いてご自宅へ招いて下さり、そこで久しぶりに奥様の手作りのランチを御馳走になった。その時には、トロイヤー先生よりも、ミセスの方がはるかに元気で、約2時間のうちの大部分をミセスがお話しになった。その話の大部分は、自分たちにとっては、本当にICUへ遣わされたことが恵みであり、どこへ行ってもICUの卒業生がいて、活躍をしていることが自分たちにとっての誇りであり、また喜びである。そしてその卒業生に会うことができることは本当に嬉しい、ということであった。

戦争を終結させるためであったとはいえ、広島と長崎に原爆を落とすことへの償いの一つとして、戦後の日本へキリスト教大学を捧げること、そのために理想のリベラル・アーツ・カレッジとしてICUを創るために遣わされたのだったから、トロイヤー先生はある意味では戦後のクラーク先生あたるといってもよいのかも知れない。トロイヤー先生は、ICUへ派遣される前は、将来を嘱望されたシラキウス大学の心理学の若き教授であったということだが、ICUへ行かれ、ご自分の方向を変更されたことには全く後悔していないとはっきりといわれた。

しかし、「ただ、ひとつだけ、心に掛かっていたことがあったのだけど・・・」と、ミセス・トロイヤーは、思い掛けないことを次にお話して下さった。「それはね、自分たちは、日本へ高校生の息子を一人連れていったの。ところが、その息子があんまり勉強しなくてね、遊んでばかりいて、結局大学へは行かなかったのよ。それで、そのことが気にかかっていた、ああやっぱり日本へ連れていったのは間違っていたのかな、と長い間思っていた

の。でも、そのことはずうっと息子には訊けなかったの。ところが、この間息子に会った時に、ひょっと、「お前を日本へ連れて行って申し訳なかったね、恨んでいただろうね」と言ったのね。ところが、「何をいっているのママ、僕にとってはあの時が一番幸せだったんだよ。あの時があるから今の僕があるんだよ。恨むどころか本当に感謝しているんだよ」と、言うじゃありませんか。あれには本当に驚き、また嬉しかったわ。長い間、息子に申し訳なかったかなと思っていたことが、そうではなくて、逆に感謝されていたというんですもの・・・だから、ようやく気掛かりだったことがなくなったの。」そう言って、ミセス・トロイヤーはトロイヤー先生に相槌を求め、先生もそれに対してうなづかれたのだった。

私が5期生としてICUへ入学したのは1957年であったので、その時には、そのご子息はもう米国へ帰っていてICUにはいなかった。そして、シラキウスにいた間にもそのご子息が日本にいた話は一度も聞いたことはなかったの。その話を聞いて本当に驚くとともに、人間が何によって育てられ、また教育の結果というものは何によって評価したらよいのか、またいつそれが意味をもつか、難しいそして不思議なものだと思った。そして、お二人をお訪ねして、そのお話を伺うことができ、本当によかったと思ったものであった。

それがお二人にお会いした最後であった。

今あらためて振り返ってみると、先生から教室で教えて頂いたことよりも、ご自宅へ伺っておしゃべりしたり、また御馳走になったことの方が、はるかに心に残っているように思う。ということは、トロイヤー先生の働きと共に、ミセス・トロイヤーのなさった事が、いかに大きな影響をわれわれに与えて下さっていたかということであろう。今のICUにそれがあろうのだろうか。

今は天に帰られたミセス・トロイヤーの、
数え切れないほど多くの我々に与えて下さっ

た、そうした深い愛に感謝しつつこの一文を
捧げたいと思う。

トロイヤー先生ご夫妻追悼



学務副学長・ICU 2期生
齋藤和明

ただいま、土橋さんの話しを伺っていて、
大学時代に私はずいぶんわるいことをした
んだと、思い出しておりました。第一男子寮
にいた私の部屋では、四人それぞれ違う学年
で、そのうちの4年生が私でした。1年生
が土橋信男君で、ほかの二人は3年生の石渡
君と2年の奥田君で、みないつも飢えている
ようでした。そこで、私は彼らを食べさせな
ければならぬのでした。

土橋さんの話から、私はシェイクスピア
の『リア王』の一場面を思い合わせていまし
た。リア王は自身の最愛の末娘を勘当して、
二人の間には深い溝ができてしまいます。そ
して劇の最後で和解のときがおとずれました。
娘のコーデリアは、父から祝福を求
めます。その時の父の台詞は、「もしもお前が
祝福を求めるなら、私が膝まづく、そしてお
前からの許しを乞おう」でした。美しい、互い
に傷ついた父と娘との和解の場面です。二人

の心が結びつくときです。娘が祝福してもら
おうと願うと父のほうがか先に膝をつこうと
するのです。二人の傷の癒される場面です。

トロイヤー先生ご夫妻に私たち四人が食事
に招かれたその夜のことは、忘れることがで
きません。ほんとうにおいしい夕食でした。そ
のあと四人で合唱をしてお礼の気持ちを表わ
そうとしました。しかしまずい表わし方でした。
私は心の底から感謝していたその気持ちを言葉
で表わせず、もどかしく残念に思っていました。
ですが、お暇するときに、戸口でトロイヤー夫
人が、思いがけず私の手をとって、私たち四人
の訪問に対して、なんと感謝して下さいました。
あなたたちの今晚の訪問は慰問でした、最近
のトロイヤー先生が必要だった癒しの香油で
した。そう、ミセス・トロイヤーはおっしゃっ
てくださったのでした。

モーリス・トロイヤー先生は、大学の教師
の教師たるべき模範でした。そして、トロイ

ヤー夫人は、ICUファミリーの母と呼ばれ
ていました。そのころのICUは、「真の家
族」のようでした。のちに副学長になられたキ
ダー先生も、トロイヤー先生を模範にしてお
られました。また、キダー夫人もICUをよく
するため、学内での生活をとおして、トロ
イヤー夫人の模範にならっておられました。
お二人とも飢えている貧乏な学生に対して
いろいろな援助をしてくれていました。

先日キダー先生から、トロイヤー先生の訃
報を知らせてくれるお手紙を頂きました。そ
れには、こう書かれていました。「あのころ、
お二人は私たちにとっての両親のようでした。
思い出す多くのことのうちこんなことが
ありました。初めての確定申告書の紙が届い
たとき、海外からの教員をみなお宅に招い
て、書き方の説明をしてもらいました。私の
収めるべき税金は、とうてい払えない額で
した。どうも払い切れそうもない、とつぶや
いたら、トロイヤー先生が、そのお金貸してあ
げよう、と言ってくれたのでした。あのころ
は、そういう時代だったのでした。」

そうです、トロイヤー先生が同僚の教員た
ちや学生たちに愛の実践をなさって見せてお
られた時代とは、そういうものでした。第一
期生の佐藤純男氏は、ICUの前身の語学研
修所時代の思い出を、こうつぶっておられま
す。夏休みには、クニ・ハウスと呼ばれてい
た寮からみな帰省しますが、何人かは都留先
生や、寮母の竹内さんといっしょに残ってい

ました。そんなある朝、泥棒にはいられて、
片づけてトランクなどにまとめておいた荷物
が盗まれてしまったのです。間もなく幾つか
のトランクは、寮の北の林の中で見つかった
のでしたが、中身は、消えていました。本は
あちこちに散らばっていました。

トロイヤー先生は、その事件を聞いて、最
初の教養学部長クライダー先生といっしょに
来られて、着る物が盗まれた学生に背広を下
さったのでした。佐藤さんも上等な背広をも
らって、得意になっていたそうです。

ICUは長くトロイヤー先生ご夫妻の眼に
見えないお導きによって支えられてきまし
た。大学はお二人のあたたかい慈愛に満ちた
お人柄に対して、またその使命感に対してつ
ねに感謝しています。これらのご夫妻の特性
はみなキリストの愛にねぎしているものであ
ります。ICUはトロイヤー先生ご夫妻の思
い出によってさまざまな面で力づけられつづ
けることでしょう。私自身、個人として、ト
ロイヤー先生ご夫妻が示して下さいました模
範に従おうとしてしているのですが、お二人は、
私たちすべてにICUでの日々の歩みを高め
るための神への奉仕のあり方を実践して示し
て下さいました。私は、ICUと学長に代
わっていまここに立っております。学長と私
はご遺族の方々にここからのお悔やみを申
し述べます。七人の孫、十五人の曾孫さん
を含めてのトロイヤーご一族の上に神様のお慰
め、お恵みをお祈り申し上げます。



返 答

デイヴィッド・A.トロイヤー

残された私の家族と私は、今日ここにこんなにたくさんの方々私たちの両親のためにお集まりくださっているのを見て、少々驚きながらも、大変嬉しく、また励みに思っております。私たちにとっては、二人は、ミッショナリーでも教師でも人道主義者でもなく、父と母でした。二人はいつも一緒でした。

ここにいらっしゃるたくさんの方々、モーリスとアルヴィラ-----彼女はビリーと呼ばれるのを好んでいましたが-----の二人を実際にご存知でいらっしゃいますのでしょうか。ある意味で、歴史としての彼らを知っていらっしゃるのでしょうか。

このことはきっと二人を驚かせ、喜ばせることと思います。(私たちのどれだけの者が、自分自身を歴史の一部であるなどと考えることができるでしょうか。)

ICUの初期の年月をここで過ごしたことは幸運なことでした。私たちが到着した頃は、泰山荘、本館、格納庫、湯浅先生のお宅、古い楓林荘のほかには何にもありません

でした。それがここまで発展するとは!

その頃の私はまだ幼くて、両親がどんなことをしていたかもよく知りませんでした。私が知っていたことと言えば、ここが優れた学生たちのための学びと進歩のための特別の場であるということくらいでした。ICUは民主主義とカリキュラムを超えた学びにおける勇敢な実験の場であらうとしていました。

父と母の忙しさは、ICUの開学前から始まっていました。そして、開学してからはなおのこと、この大学への二人の献身は揺らぐことなく、いつも二人の心を占めていました。ICUは二人の過去となり、現在となり、未来となりました。

たくさんの方々、たくさんすばらしい手紙をくださって、私たちの両親のことを語ってくださいました。それらのすべてにここで感謝するには時間が足りません。両親が語ってはくれなかった、私たちの知らなかったことがたくさんありました。

今ここで、私たちの家族の歴史に筆を添えてくださった、多くの皆様にお礼を言わせていただきます。

ひとつ思い出に付け加えさせてください。父の死後、私は追悼式のために写真を整理していました。すると、姉のジョーンが、どの写真もみんな二人一緒に写っていることに気づきました。父はいつでも母を見ていました。それは別に驚くことではありませんでした。

父と母はこの大学を愛していました。地上の人々の善と神の栄光のための良き動機へと自己を導くことへの献身は、ふたりの感覚の中心にあるものでした。それは、二人がおのずと身につけた感覚でした。彼らはそれぞれイリノアとインディアナで育ちましたが、世界中からいつも宣教師たちがやってきては、彼らの家族のところに滞在し、経験と献身を共有していたからです。

父は1986年の彼の自伝を次のような「三つの信念」で締めくくっています。

1. 内外のクリスチャンたちが、キリストの期待通りに、平和を実現する者として生きようとするれば、原子力や他の技術は人類を滅ぼ

すためではなく、人類のために使われることができるかと私は信じる。

2. もし私たち自身が、自分たちが問題の一部であることを理解して認めるならば、-----兄弟の目からおが肩をとろうとする前に、私たち自身の目の中の丸太に気づくならば、世界の様々な紛争を解決するために有効な役割を果たすことができると私は信じる。

3. 上の1と2が、内外に対する信頼と尊敬を養うものであり、技術(核)の時代に建設的に生きるために必要な要素であると私は信じる。

たくさんの方々父の考えをおわかりくださることと思います。それはICUにおける父の哲学の倫理的な結論でした。

私の姉のジョーン、義姉のルース、私と妻のバーバラは、今日ここにお集まりの皆様方に、そしてモーリス・トロイヤーとビリー・トロイヤーへの皆様方のお気持ちに心から感謝申し上げます。二人が皆様方をいつも愛していたように、二人は、今日、ここで二人にお与えくださった名誉のために、再び皆様に感謝と愛を捧げていることでしょう。



式後、茶会でのスピーチ

トロイヤー先生の思い出

本学名誉教授
亜細亜大学教務委員長
原 一雄

モーリス・トロイヤー先生のことを思い出
す時、まっさきに心に浮かぶのは、1961年の
春、本館2階の東側の先生のオフィスに、初
めて先生をお訪ねした時のことでもあります。

新任講師としての自己紹介を終わるのも待
たずに、先生は低い声で私にこう尋ねられま
した。「原先生、あなたの信条(credo)を述べて
ごらん下さい」

いったい私が何とお答えしたのか覚えてい
ませんが、たぶん突然のことに驚いて、言葉
を失っていたのではないかと思います。

すると、先生はその大きな手を私の顔の前
に置かれて、次のように言われました。

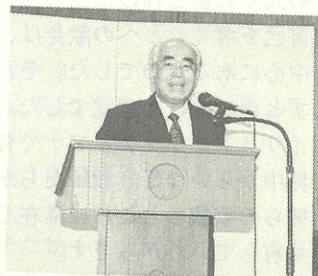
「もしあなたがICUで教員としてやってい
きたいのなら、これから言う五つのことを決
してわすれないように。」

まず第一は、研究を続けて、5年以内に本
を1冊書くようにして下さい。

次に、良い教師になれるよう一生懸命努力し
なさい。それがあなたの昇格にも役立ちます。

三つ目は、すべてのキャンパスの活動に参
加するように心掛けなさい。教育の機会とい
うものは教室の中だけではなく、四六時中、
キャンパスライフのいつでも、どこにでもあ
るものなのです。

四つ目は私た
ちは誰もが様々
な委員会のメン
バーとして仕え
ることになって
いるから、自分
が大学行政の一
部をなしている
という自覚を忘れないように。



最後に、この大学は国内外の多くの方々
に支えられているのだから、私たちはボラン
ティア活動などの社会奉仕の形を通して、感
謝の気持ちを表していかなければなりません。

研究、教育、学生の指導、行政補佐、そし
てキャンパス外での奉仕活動、これら五つの
目標が、あなたが一人前のICUファカル
ティーとなるためにこれから励まなければな
らないことです」

これが、37年前、私のICU第一日目にト
ロイヤー先生から教えられたことでありまし
た。私は現在「教務委員長」として亜細亜大
学に勤務しておりますが、この職責を英語で表
すと偶然にもトロイヤー先生がICUでなさ
れたVPAA (Vice President for Academic Affairs)
ということになります。

それ以来、私は、私たちの仲間に加わるこ
とになった新任教員の皆さん方にいつもこの
お話をしてまいりました。そうすることによ
って、私自身に対してもまた、トロイヤー
先生に教えていただいたことを実行するよう
言い聞かせ続けてきたのです。本当に、モー

リス・トロイヤー先生は私の理想の師であり
ましたし、これからも永遠にそうであろうと
思います。

御静聴ありがとうございました。

モーリスそしてビリー・トロイヤーへ

教育学科客員教授 ベンジャミン・デューク

今ここに、私たち夫婦は、モーリスそし
てビリー・トロイヤーの最後の時代に直接関
わりを持った者たちを代表して、彼らへの感謝
の気持ちを述べる機会を与えられたことを嬉し
くおもいます。私たちは、モーリスに雇われ
たICUでの最後の外国人夫婦です。発端は一通
の手紙でした。今から38年以上も前、1959
年来日するまで、私たちはトロイヤー夫妻
にお目にかかったことはありませんでした。当
時、私たちはまだ20代の半ばで、トロイヤ
ー夫妻はと言えば50代半ばでした。出会っ
てすぐに、私たちはお互いにたくさんの共通
点があることを知りました。どちらもアメリ
カ東部の小さな町の生まれで、質素な家庭
に育ち、モーリスも私も働きながら大学を
卒業し、共に公立学校の教師になりました。
そして、運命は、とうとう私たちを東京の
ICUの同じ学科で引き合わせてくれたので
した。

私たちはたいへん親しい友人になりました。
ビリーとモーリスは、私たちに家族の一
員の様に接してくれました。1966年に夫
妻がICUを去る時は、喜んで私たちに住
まいを譲ってくれました。私たちは、その
後30年、トロイヤー家に住み続け、彼ら
が作り上げた

居心地のよい
環境の中で、
三人の子供
たちを育て
あげるとい
う、特権を
与えられた
のでした。
というよう
に、私たち
の運命はト
ロイヤー家
と密接に結
びついてい
たのです。



トロイヤー夫妻と共に働いたことのある方
は、お二人がまさにICUの創設者チームの
一員であったことを思い出されることでは
しょう。チームというのは、初代学長の湯
浅博士夫妻(色々な意味で日本人離れした
クリスチャンのご夫婦でした)、そして初
代副学長のトロイヤー博士夫妻(こちら
は逆にアメリカ人らしくないクリスチャ
ンのご夫婦でした)のことを意味してあり
ます。もし、ICUの創立が神の御業によ
るものだとしたら----多くの方がそう
信じておられることと思いますが----こ
のような非凡な二組のご夫婦を、1950
年代初めの創設期にお仕わしになったこ
とは、神の最も輝かしい業績のひとつ
ではなかったでしょうか。

この類まれな湯浅・トロイヤーチームは、そのご夫人方の支えによって、さらに強力なものとなりました。それはまさに、ICUの理念そのものの実証でした。それはクリスチャンの学者からなる国際的なチームでしたが、それぞれの果たす役割は異なっており、おたがいを補いあっていました。湯浅博士は理想派でした。彼は「明日の大学」としてのICUを雄弁に語りました。

かたやトロイヤー博士は、今日の大学としてのICUに関わっていました。つまり、文部省の認可を得るために、学部の組織構成、必修科目等の計画を作成していました。言い換えれば、日に20時間の労働の中で、今日のための新しい大学の設計を手がけていたのです。そして、彼はその方面で、大変優れていました。トロイヤー博士は大学の各学科の相互関係について、鋭い洞察力を持っていたのです。

何よりも長けていたのは、教養学部という概念にはなじんでいない日本人の同僚たちにも納得がいくように、それらを説明できるという能力においてでした。その結果、戦後は文部事務次官を勤められ、私の学科の初代学科長であった日高先生とも多くの交流をもち、二人で初の大学院である教育学研究科を創設なさいました。設立の過程ではお二人の間で、よく意見の食い違いもありました。けれども、私が感謝し、敬服するのは、お二人がそれぞれのお立場の相違から大声で言い争うことはあっても、困難を克服した末には再び友人として握手しあえるという能力を持っている点でした。

トロイヤー博士は、日本人の同僚に対して、大変敬意をはらっておりました。そして同じように日本人の同僚も、世界中から集まった日本人以外の学者たち同様、モーリスを、学問的な洞察力のみならず、クリスチャ

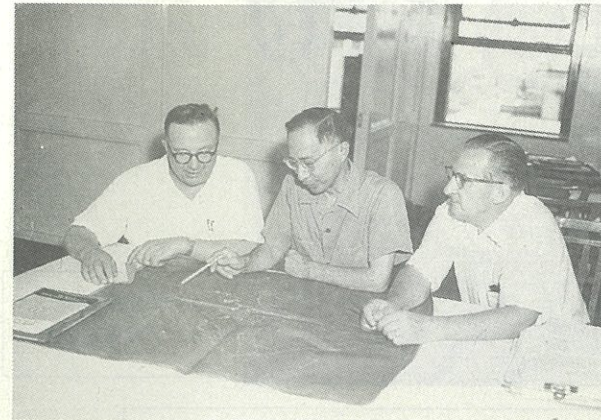
ンの学者としての高潔さゆえに尊敬していました。彼はまた、日本人、外国人を問わず学生たちにも特別な関心をいただいていた。そして、学生たちも彼のことが大好きでした。考えてみれば、トロイヤー夫妻は、疑いもなく、ICUの歴史の中の最適の時期に、最適な場所にいた、最適なカップルであったのです。

夫妻が引退してフィラデルフィアへ移られてから、私たちは何度か夫妻を訪問する機会を得ました。ある夏、私たちはICUを代表して、教授会による彼の名誉教授選出を記念する額を贈呈しに行ったことがありました。モーリスはそれをとても喜びました。数年前に最後にお訪ねした時には、すでに健康を害しており、耳も遠くなっていました。訪問の間中、彼はほとんど黙ったままでした。ペリーの方は相変わらず陽気で活発でした。彼女は言いました。「ICUのことを何でもいいから聞かせてちょうだい。モーリスにはあとで話しておくから。」

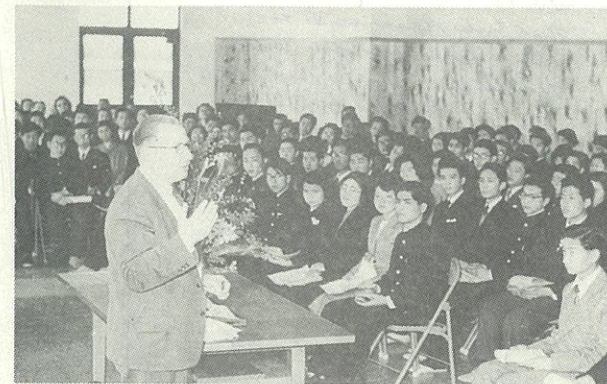
ところが、みんなで一緒に戸外を歩いていた時のこと、モーリスが突然振り返り、その日、初めてでただ一度の質問をしたのです。「今日の日本の教育界でICUは受け入れられているのか？」私はびっくりしました。おそらくその質問は、その日、ずっと彼の頭の中にあったのに違いありません。そしてそれは、50年以上前の彼のチャレンジを表わすような質問でした。思えば、その時の私の答が、彼に対する最後の感謝の言葉になってしまいました。それが私たちと彼らの最後の出会いだったからです。私はとっさに答えていました。「もちろんですとも。今日のICUの成功があるのは、あなたとペリーが何年も前にしてくださった貢献によるのですよ。」

彼は、嬉しそうに笑いました。

トロイヤー夫妻の思い出



1949年夏 教文館事務所にて
大学建設計画を練る。向かって左よりハ
ケット副学長、湯浅学長、トロイヤー副
学長



1953年4月13日 本館4階ラウンジ
ICU一期生入学式にて



CampusImproving Dayでダンス
を踊る夫妻



息子のデイヴィッドさんと



1993年2月ペンシル
ヴェニアの自宅にて

*Is it true? We hear the
New York office is to be
opened again and you will
head it up. - Good for New York,
but what happens to the
president? You need two
hits.
Could you wear another one
and do us a favor -
put up a notice on some bulletin
board saying the Trustees
send greetings to all who remember
them. I don't.
You can tell by my writing that
I'm a bit limited due to arthritis*

Marion L. Heath
Wareham, MA
Made in U.S.A.

110K35019

1996年夫妻からワイナント氏(学長
補佐)に送られたクリスマスカード

ICU Gazette トロイヤー夫妻追悼特別号

ICU 国際基督教大学
広報課

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

TEL 0422-33-3038 ~ 40

FAX 0422-33-9887

<http://www.icu.ac.jp>